

interview インタビュー

4月7日、「シルクロード」でおなじみの音楽家・喜多郎氏が東京弁護士会を訪問された。私たちを壮大なロマンにいざなう音楽創作活動についてインタビューした。
(聞き手：矢澤昌司、船木秀信、古椎庸文)

プロフィール きたろう

作曲家、演奏家。1980年NHK特集「シルクロード」の音楽制作を担当。87年第29回レコード大賞特別賞受賞。92年映画「Heaven & Earth (天と地)」の音楽監督を務め、同名のアルバムで第51回ゴールデングローブ賞作曲賞を受賞。98年映画「宗家の三姉妹」の音楽を手がけ、香港の金像奨、台湾の金馬奨で最優秀オリジナル音楽賞を受賞。2001年アルバム「Thinking of You」で第43回グラミー賞最優秀ニュー・エイジ・アルバム賞を受賞。世界中で活躍している。

作曲家・演奏家

喜多郎さん

—音楽を始められたきっかけは？

私は、独学で音楽を始めたのです。私が高校生の頃はグループサウンズの全盛時代で、音楽に興味を持って、グループを組んでギターを弾いたのが最初です。学校を卒業した後、音楽を職業にしていきたいと思ったのですが、自分に音楽のベースがないので、自分の感覚や耳を頼りに、キーボードなど様々な楽器にトライしていったのです。そういうとき、クラウス・シュルツというドイツのシンセサイザー奏者に出会い、魅せられました。

—作曲や演奏活動をされていて、至福のときというのは？

作曲の場合は、最後の音を入れてこれで曲が完成するというときはいいですね。コンサートの場合は、多くの聴衆の前でいい演奏ができたときは満足感があります。

—それは、聴衆との一体感のようなものですか。

そうですね。自分だけではなく、聴衆との間でバイブレーションが交感しているというか、会場の隅々まで音のひとつひとつが届いているという実感が得られたときはいいですね。

オランダのアムステルダムでのコンサートだったので、会場全体の空気に音楽が響き渡っている感じが分かるのです。自分の出す一番弱い音でも、2000名の会場の一番後ろの席のところまで届いているのが自分でも分かりました。いつも、そういうものを求めてコンサートをしていますが、今までにそういう演奏ができたのは、残念ながら数えるほどしかありません。

—アメリカに行かれた理由は？

アメリカは音楽社会ですから、本場で、自分の作ったものをどこまで評価してもらえるか試してみたかったということがあります。

—どういときに曲のインスピレーションが浮かぶのですか。

私は自然の豊かなところに住んでいるのですが、自然の中にイマジネーションになるものも多くあるのです。例えば、木の葉や枝が風に揺れていたり、木の葉が流れていたりするのを見ていると、そういうひとつひとつの動きが曲のヒントとなり、そこから一枚の絵のようなものが心の中に浮かぶのです。その絵のようなものに合う音をつ

けていくという感じです。だから、最初は漠然としているのですが、それが少しずつクリアになってくるのです。

—仕事をなさるのはどういう時間帯ですか。

朝が多いですね。早朝からスタジオに入り、徹夜をしたり、3日くらい続けて仕事をしたこともあります。

—アルバム「Thinking of You」でグラミー賞*を受賞されていますが、このアルバムは何をテーマにしていますか。

この曲を作るまでは、宇宙的なタイトルが多かったのですが、この曲を作るときは、人間愛や人間の思いやりというものをテーマにしていました。

アメリカに移って最初に購入し、それまで多くの曲を作ってきたピアノが、実は、水道管が凍結して破裂した水に浸かって駄目になってしまった事件があったのです。今でもそのピアノを大切に持っているのですが、そのピアノへの感謝の想いを、そのピアノで作った最後の曲の名前にしたのです。あなたを想っているよ、という。

—NHK特集の「シルクロード」という番組の音楽を担当されたきっかけは？

担当する前に、「オアシス」というアルバムを出していたのですが、番組の担当者の方が、このアルバムを聴かれて、私を訪ねてこられたのです。

—「シルクロード」という音楽のテーマは？

まさに、西域や西域文化に対するロマンですね。そういう想いの中で映像に音をつけていきました。本来は、作曲する前に実際に現地に行くのですが、あのときは、映像だけで十分作曲をすることができました。作曲した後で中国に行ったのですが、自分の曲を聴きながら、シルクロードのイメージに合っていると思いましたね（笑）。

—最近、諏訪の御柱祭りや古事記をテーマにした音楽を発表されていますね。

私は、日本で生まれて日本で育ちましたから、日本に古来からあるもの、日本人の持っている精神的な奥深さというものを、海外の人にも作品として理解してもらいたいと考えています。

—NHKの「四国八十八箇所」という番組の音楽を担当されましたね。

はい。今、四国の八十八箇所の寺の鐘の音をひとつ

ひとつ拾って、それに自分の音をつけて曲にしているのです。鐘の音の中には、f分の1というゆらぎの成分があり、聴く人の心を鎮めてくれる作用を持っているので、それを聴いてもらえたらと思っています。八十八もあるので、ようやく半分まで来たところで、あと10年近くかかると思いますが、最終的にそれを仕上げてみたいと思って続けています。まだまだ先が長いのですが（笑）。

—インドで瞑想をした体験をお持ちかどうかです。

人間の心の中には両面があると思うのです。その人間の心の中を深く掘り下げて、人間の根源みたいところまで、音で表現できればと思っています。

—アメリカと比べて日本の司法や弁護士に対してどのようなイメージを持っていますか。

アメリカは弁護士社会で、弁護士の数が多くて細分化している感じですが、日本はそうでもないようですね。私の友人に弁護士がいますが、いずれにしても、人と人との紛争の間に入っていかれるわけですから、本当にたいへんなお仕事だなあとと思っています。

—今後は、どのような夢を持っていますか。

私は、アメリカの同時多発テロのとき、日本からアメリカに向かう飛行機に乗っていたのですが、その飛行機が予定を変更してハワイに緊急着陸したのです。この同時多発テロを見て、自分は音楽家として何かできないかと考えました。音楽には人を感動させたりする力がありますよね。ですから、平和な社会が来るために、何か、音楽で表現できたらと思っています。このような時代ですが、音楽で人の心を癒せたらと思っています。そのようなものを表現していきたいですね。

—本日は、お忙しいところ、素晴らしいお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。

*グラミー賞：世界で最も権威のある音楽賞



音楽には人を感動させる力がある。アメリカ同時多発テロを見て、平和な社会のために、音楽で何か表現できたらと思っています。